

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：17201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22760465

研究課題名（和文） 有明海沿岸低平地の居住空間とその展開－低平地の居住再編に向けた計画要件－

研究課題名（英文） A STUDY ON OF SPATIAL CHARACTERISTIC AND RESIDENCE SYSTEM FOR THE FUTURE DEVELOPMENT IN ARIAKE SEA COASTAL AREA

研究代表者

後藤 隆太郎（GOTO RYUTARO）

佐賀大学・大学院工学系研究科・准教授

研究者番号：00284612

研究成果の概要（和文）：

縮減社会や自然災害への対応が求められる現在、本研究は浅海干潟等の自然から獲得してきた湿潤な有明海沿岸低平地において、「どこに、どのように住むべきか」との基礎的な問題意識から史的および空間実態、これら二つの側面から調査研究を行った。

具体的には、まず居住環境基盤の史的・量的解明として各種地誌資料や地図資料の収集整理を行い、近代以降の居住地形成や宅地開発の実態調査・データ整理を行った。

次いで、居住再編に向けた質的解明及び計画要件の提示として、以下三つの居住地種別ごとの調査分析し、今後の展開方策等に関する視点や枠組みを検討した。1) 縮減の進む歴史的市街地など居住地の縮減実態の把握、今後注目すべき空間資源やその魅力について考察した。2) 郊外住宅地・田園小規模開発地において、農地を転用の繰り返しによる小規模宅地開発の成立過程の把握とともに、そこで評価しうる空間的特徴を整理した。3) 郊外集落および田園拠点集落について、現状やその両者の関係を整理し、さらに今後の展開に向けて住民への居住施設の維持、また今後重要となる景観的側面からの新たな計画課題を考察した。

研究成果の概要（英文）：

Living environment of today in Japan, is required to respond to natural disaster and reduction of society. This study is thinking about "Where, how to live" from two aspects of actual spatial condition and historical condition in wet Ariake Sea coastal residential area, which has been obtained from natural tidal flats.

Specifically, we collected organize the map material and various topography data as historical and quantitative understanding of the living environment infrastructure, and also we analyzed the survey of residential development of modern era.

In addition, as for the residence restructuring planning of the future, we investigated the framework and point of view of the way forward of residence improvement for each type of the following.

1. For historical downtown, we conducted a survey analysis of spatial resources and actual reduction of residence space.
2. For rural areas and small development suburban residential area, we understand of the formation system of a tiny residential development of repeated conversion of agricultural land, and also we considered the spatial features there can be evaluated.
3. For rural central settlement and suburban settlements, we study the relationship of both current situations. In addition, we considered new planning issues about the landscape aspects and good residential facilities that are important future to maintain to residents towards the development.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	250,000	150,000	400,000
2012年度	250,000	0	250,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：都市計画・建築計画

キーワード：居住再編・立地環境・地域資源・景観・沿岸低平地

1. 研究開始当初の背景

沿岸低平地にはこれまで多くの居住の場がつけられているが、浅海干潟等の自然から獲得してきた湿潤な土地であるため、そこでの居住には様々な工夫や不断の営が必要である。縮減社会や自然災害への対応が求められる現在、「どこに、どのように住むべきか」との問題意識から、①人々による空間開発の経験を居住空間計画史として明らかにし、②今後着目すべき居住空間について管理や利用の実態から再評価し、村落・郊外、市街地等を通観する低平地の居住再編について検討、提示することが重要である。

2. 研究の目的

沿岸低平地は、干潟等の自然から土地や居住地を獲得してきた場所であり、その居住には不断の営みや工夫が必要である。特に今日、自然災害や縮減社会への対応が求められ、「どこに、どのように住むべきか」を捉え直し、今後の居住について再検討が必要と考えられる。具体的には、有明海沿岸低平地の空間開発の経験を居住空間計画史として明らかにし(目的 a)、居住空間を管理・利用の実態から再評価し、村落・郊外・市街地を通観する居住再編について検討しようとする(目的 b)を目的とする。

3. 研究の方法

目的 a：有明海沿岸地域における居住環境基盤の史的・量的解明。土地及び居住地形成の史的・量的研究、地理情報化による基本データベースを作成。上記に施設形成の史的・量的研究、現地調査を加え、地域別の居住環境基盤の特性と課題を分析。史的研究では、すでに関係のある佐賀大学の機関や研究者や関係自治体・機関の情報をもとに研究を遂行する。

目的 b：居住再編に向けた質的解明及び計画

要件の提示。目的 a の成果を踏まえ、重要課題・事例対象を抽出し、空間及び居住者情報等の基礎調査を実施。課題・対象ごとに調査項目を設定して詳細調査の実施、計画要件を分析し整理する。

4. 研究成果

目的 a：「有明海沿岸地域における居住環境基盤の史的・量的解明」関連。

各種の文献(都市史、集落地理関連、各種地誌資料、民家研究)、圃場整備時の従前地積図、航空写真等の収集し整理分析を進めた。また、近代以降の居住地形成について区画整理・面的宅地開発の把握や実態調査・データ整理を行った。

目的 b：「居住再編に向けた質的解明及び計画要件の提示」関連。

b-1) 縮減の進む歴史的市街地など居住地の縮減実態の把握、今後注目すべき空間資源やその魅力について考察した。

具体的には佐賀県佐賀市の中心部における水路と関わる屋敷の調査を行い、水路やその水の直接的な利用は少ないものの、敷地内での建物配置や外部環境が水路や水辺と関わっている多く事例抽出をすることができた。道に接する部分に対して水路と接する敷地の裏や奥における水辺が生活空間として関わっていること、また水辺に畑や花壇を用いた当該地域の特徴といえる空間利用や南入りの母屋を含む敷地配置のパターンを見いだすことができた。

また、佐賀県小城市旧城下町地区の水路網の実態を明らかにし、特に敷地中央を貫通する「中水路」の実態を把握した。このような当該歴史的地区の空間資源やそれらと住まいとの関わりを整理した。なおこれら成果の一部は、市民一般の方が理解できる資料冊子

を作成し、配布や講演などで説明を行った。

また、今日の中心市街地や郊外新興住宅地では空き家や住民の高齢化が問題になっているため、地方小都市が抱える問題点を多く含んでいる佐賀県小城市小城町中心部を取り上げ、地区毎の分析から地割変化の有無や居住動向に関するアンケート調査から、地区内や周辺住民の居住動向・意識に着目した住宅や敷地の活用方策を考えるための基礎資料を整理した。

b-2) 郊外住宅地・田園小規模開発地において、農地を転用の繰り返しによる小規模宅地開発の成立過程の把握とともに、そこで評価しうる空間的特徴を整理した。

具体的には、佐賀県佐賀市高木瀬地区など旧集落地域において 1970 年代ごろから急速に進んだ市街化過程の実態を整理するとともに、一見すると未秩序にも見える住宅地ではあるがそこには従前からの集落の屋敷単位や農地の空間単位ごとに小規模開発が進むことを見いだすことができた。その単位ごとの住居やその群としてまとまりが一定の空間秩序を与えていること、またこれらのまとまりとまとまりの間（際）の部分には、半私的空間（共同的な花壇や残余的空地）ともいえる空間資源を確認し、それが地域コミュニティーの維持を支えている状況やその可能性について整理考察することができた。

b-3) 郊外集落および田園拠点集落について、市町村合併後の現状やその両者の関係を整理し、さらに今後の展開に向けて住民への居住施設・サービスの維持、また今後重要となる景観的側面からの新たな計画課題を考察した。

具体的には、佐賀平野の特有の民家の形式である「くど造り」民家について、これまでの多くの既往研究を精査し、佐賀平野等の「くど造り」民家の成立要因について、大屋根を避けつつ平面拡大に応じたこと等、を考察した。また現地調査を踏まえ、屋根谷をもつ「くど造り」民家の向きと強風との関係が認めにくいこと、民家（屋根谷）の向きが一定となる地区及び屋根谷の向きが周囲からの見えにくさに依拠する地区の実態を明示している。さらにその「見え方」に対応すべく屋根谷の見えない「漏斗造り」民家へと展開するとの試論を提起し、当該地域における住まいの本質的なあり方を示し、今後の住宅や住宅地のあり方の一資料を提示した。

また、佐賀県嬉野市（旧嬉野町）の当該地域の茶生産と居住の関わり着目し、茶畑をもつ集落の空間構成とその景観的特徴について調査研究した。嬉野町には全域わたり茶畑

が分布しており、景観的な側面から、①緩斜面の茶畑、②急斜面の茶畑、③平坦面の茶畑（屋敷内又は田畑の転用）、④丘陵・山上の大規模茶畑、と地形ごとの4つの種類に整理した。それぞれの集落が立地する地形条件を考慮したタイプ分けを行い、河岸の田、住居群の畑、その背後に石垣をとまなう茶畑群として構成する集落、河岸の田や河岸段丘上に茶園をもつ住居群及び茶畑や一般の畑が集まっており、その背後の緩やかな斜面に茶畑が広がる集落、河岸に平坦面が広がり、住居群内に茶畑が広がる集落。以上、各集落タイプごとの土地利用や景観的特徴を指摘した。さらに、今後の景観保全等に向けた課題として、茶畑を持つ集落空間は、自然地形に対応しかつ茶栽培といった人々の営みの変遷が組み込まれ、また、今日にも継続する人々の生活が重層的に展開する歴史的・文化的な景観を有しているといえる。このような景観を保全する意義は、①縮減が進む郊外集落の生活者自身が地域の景観やそのアイデンティティを認識する契機となること、②茶の産地として、良好な地域イメージを外部に知らしめ、さらには地域の生業を活かしたツーリズム等への展開を期待できる。

さらに、佐賀県小城市芦刈地区（有明海沿岸部）の集落地域におけるアンケート調査から、地域に人々の景観イメージについて明らかにした。世代や属性ごとに「大切と思う」景観要素を抽出し、特に干潟を含む広大海又は平野についての季節ごとの評価されえる景観要素を抽出することができ、一般に広く高低差のない地域における、景観形成に向けた改善の視点を提示することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

(1) 田中文美、後藤隆太郎、茶畑をもつ集落の空間構成とその景観的特徴—嬉野市嬉野町を対象として—、日本建築学会住宅系研究報告集 VOL.6, 179-184、2011年12月 査読有

(2) 福井幹人、後藤隆太郎、有明海沿岸低平地における景観・住環境イメージに関する研究—居住者の属性に着目した比較検討—、日本建築学会住宅系研究報告集 VOL.5、139-144、2010年12月 査読有

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

（1）後藤隆太郎編『水の町 小城 景観まち歩きマップ』、資料冊子、2012年3月

（2）後藤隆太郎・田口陽子・田中文美・岡本歩・宮本尚美・近藤雅也、『佐賀をさがす「まちなか居住」ガイド』、私家版、2011年3月

（3）後藤隆太郎、「小城と鯖岡小路の魅力」、市民・まちづくり団体への一般講演（鯖岡小路景観まちづくり懇話会）、2012年9月28日、佐賀県小城市鯖岡公民館に於いて

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 隆太郎 (GOTO RYUTARO)

佐賀大学・大学院工学系研究科・准教授
研究者番号：00284621

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

※研究協力者

福井 幹人 (FUKUI MIKITO)

佐賀大学・大学院工学系研究科・博士前期課程学生（当時）

上岡 洋祐 (UEOKA YOUSUKE)

佐賀大学・大学院工学系研究科・博士前期課程学生（当時）

田中 文美 (TANAKA AYAMAI)

佐賀大学・大学院工学系研究科・博士前期課程学生（当時）